コラボ教育での学び　～世代を超えた交流の効用～

神戸市看護大学 2 年生　我那覇貴

学生が地域の方々と接することで学ぶ「コラボ教育」には様々な内容のものがありますが、その中で私たち2回生は今回、「地域の保健室」として看護学生が地域住民の方々の健康測定を行いながらお話をお聞きし、地域の方々と一緒に健康と生活について考えるという活動を行いました。「地域の保健室」に参加される地域の方々には高齢の方々が多いのですが、その方々が日ごろどのような生活を過ごしておられるのか、また、健康について不安に思っていること、気をつけていることや工夫していることについて、お話を聞かせていただきました。

私が普段生活している中では地域の高齢の方々と接する機会は少なく、日頃の生活の様子、また、どのようなことを気にしておられるのかについてお話を聞く機会がなかったので、実際にお話をお聞きして新しい発見がいくつもあり、とても良い経験をすることができました。やはり、私達とは生活のリズムも違いますし、健康に関して気になる事柄やその対策などにも違いがあるのだなと感じました。例えば、腰痛に対して板の上で寝たらよくなるという情報を知り合いから聞いて、それを試されていたり、公園の遊具を使って自分なりの運動をされていたりと、自分の健康のために自ら積極的に情報を得て、それを実践されている方々がおられました。

また、住民の方々と接してみて感じたことは、すごく楽しそうに話をされているということです。私たちのような若い人と話す機会は、私たちが地域の高齢の方々と話す機会が少ないのと同様に少ないようです。そのため、私たちが地域の方々と話すのを楽しみにしていたように、地域の方々は私たちと話すのを楽しみにしてくださっていました。

私は今回の経験を通して、これからの地域づくりにはこのような世代を超えた交流の場と活動が増えることが必要だと改めて感じました。これまでのように、学生は学生とのみ、高齢者は高齢者とだけというのではなく、世代を超えた関わり合いが増えることが地域を元気にしていくのだと思います。高齢者が多くなり子供が少なくなっている今の時代、世代を超えた、もっと気楽に参加できるコミュニティーの場が増えることで地域は活性化されると思います。

基礎看護技術演習 III 学外演習
竜が台地域福祉センターでの
学外演習にて(筆者は、後列右端)

COC 研究ひろば　第４回
～医療・保健・福祉・介護における「多職種連携」の組織づくりを考える～前編

神戸市看護大学 地域・在宅看護学分野 講師　宇多みどり

我が国はかつて経験したことのない超高齢化社会を迎えようとしています。これにともない高齢・独居世帯が増加し、在宅医療・介護の現場では、加齢および認知症を含む疾病による身体機能低下や、施設（入院）から在宅への移行を促す政策による「在宅での看取り」の支援など多くの課題を抱えています。そのため、従来の医療や介護の支援のみならず、福祉や地域の見守りなど様々な支援が切れ目なく提供されるシステムが必要とされています。これは「地域包括ケアシステム」と呼ばれ、多種多様な職種が目的と情報を共有（連携）し、各々の専門性を生かして役割を分担するというものです。

須磨区では、平成24年に訪問看護ステーション連絡協議会が中心となり自主グループである「須磨区多職種連携を考える会」が立ち上がりました。この会は、より充実した地域ケアシステムの構築を目指し、日頃あまり顔を合わせる機会のない実務者同士が顔の見える関係性を築くために、年2～3回「多職種交流会」を開催しています。運営は主に、須磨区の医療・福祉・介護の実務者8名ですが、2年間で延べ約700名、27職種の方々が参加されています。COC共同研究では、この会の協力を得て須磨区の「多職種連携」における現状と課題を分析し、地域の特性に沿った「多職種連携」に関する組織づくりの方略を「多職種交流会」参加者のご意見を聞きながら検討しています。

次号後編では、今年8月29日（土）に行われた第6回「多職種交流会」での方略の提案とその結果をご報告いたします。

「須磨区多職種連携を考える会」
運営会議の様子